



おかげさまで 15周年  
藤沢エデンの園 スペシャル座談会

# 「ここに来てよかった」を叶える スペシャリストたちの連携と思い

住宅型有料老人ホームでありながら、暮らしの自由さと、将来への安心を一体で支えられる。藤沢エデンの園は、住宅型でありながら、医療や介護、生活支援がすぐそばにある高齢者複合施設です。2011年4月に神奈川県藤沢市に誕生した「聖隷藤沢ウェルフェアタウン」には、住宅型の一番館をはじめ、介護付の二番館、ケアプランセンター、デイサービス、訪問看護・介護の在宅サービスがそろっています。15周年を迎えた今、藤沢エデンの園だからこそ実現できている支援のあり方と、その思いについて、各事業所の責任者が語り合いました。



ウェルフェアタウン版  
地域包括ケアシステムとは

高塚：藤沢エデンの園がスタートして、15年になります。開設当時、日本の高齢化が進む中で、「高齢になっても、できる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられるように」という考えのもと、「地域包括ケアシステム」の構築が国を中心に進められていました。これは、住まい、医療、介護、予防、生活支援が一体となって、その人らしい暮らしを人生の最期まで支える仕組みです。私たちが藤沢エデンの園で目指してきた姿も、まさにそれと重なります。

住宅型の一番館は、ご入居者にとっての「自宅」。元気なうちは自由に、自分らしく暮らし、支援が必要になれば在宅サービスが寄り添い、24時間の支援が必要になった時には二番館へ住み替えることができます。入居から最期の時まで、できるだけ不安なく、安心して暮らし続けていただく。その仕組みが「ウェルフェアタウン版地域包括ケアシステム」です。



聖隷藤沢ウェルフェアタウン 総園長  
藤沢エデンの園一番館 園長  
高塚 由紀子  
1991年入職

在宅支援のスペシャリストが  
豊富な情報をもとに瞬時に連携

菅野：二番館にも介護や看護のスタッフはいますが、在宅支援に携わっている皆さんは、本当に多くのケースを経験されています。日々最前線で支援をしているスペシャリストだと感じる事が多く、私自身、とても刺激を受けています。そうした支援が身近にあるのは、ご入居者にとって本当に心強いと思います。

大野：そうですね。一番館は住宅型ですから、直接ケアを行うことはありません。日常的なケアは在宅サービスと連携して行います。ご入居者の小さな変化を察知し、ケアマネジャーに相談すると、驚くほどスピーディーに、質の高い支援が始まります。介護の経験がある私から見ても、本当に



藤沢エデンの園一番館  
生活サービス課 課長  
大野 清子  
1992年入職

頼りになる存在です。どの在宅支援を選ぶかはご入居者の自由ですが、特別な事情がなければ、皆さま聖隷の在宅サービスをお選びになります。

高塚：各事業所がエデンの園の中だけでなく、地域とも日頃から関わっているので、情報量がとても豊富ですよ。医療の分野は日々進歩していますが、訪問看護の皆さんとの連携は、エデンの園の看護師にとっても大きな学びになっています。

金子：ケアプランを立てる立場としても、看護、介護、生活支援がすぐに連携できる環境は本当にありがたいです。ご入居者の体調や暮らしの様子を総合的に把握できるので、その方に合った提案がしやすいと感じています。

元気なうちは自由を謳歌  
いざという時の安心感

大野：二番館のご入居者は約250名。フロント含め、12名の生活サービス課職員で見守り、ご支援をしています。年齢は60代から100歳近くまでと幅広いですが、元気な方が多く、趣味や旅行を楽しみながら、それぞれのペースで生活されています。藤沢は環境も良く、都心へのアクセスも便

利なので、「自由な老後」を望まれる方にとって、とても魅力的な場所だと思います。

高塚：住居型ならではの自由さと、いざという時の安心感。その両方を選ばれている印象があります。実際の支援は、生活サービス課を起点に始まるケースが多いですね。

大野：ご本人から相談をいただくこともありますが、日常の関わりの中で私たちが変化に気づいて動くケースが多いです。一番館はサークル活動が盛んで、食堂や大浴場など交流の場も多いため、他のご入居者から「少し様子が違うのでは」と声をかけていただくこともあります。そうした声も大切にしながら、まずはご本人やご家族、ケアマネジャーと相談します。

介護保険の申請や、どのような在宅サービスが必要かを調整し、支援が始まっていきます。



藤沢エデンの園二番館 園長  
菅野 智晴  
2003年入職

聖隷ケアプランセンター藤沢 所長  
金子 英里  
1996年入職



生活サービス課が  
家族のように伴走支援

高塚：生活サービス課は、本当にご入居者一人ひとりに目を配り、些細な変化も見逃さない、心強い存在ですね。

金子：ケアプランセンターには藤沢エリア全体から相談がありますが、一番館では初期面談からサービス導入まで、生活サービス課が家族のように寄り添ってくれます。支援が始まった後も、すぐそばにいてもらえる安心感は大きいですね。また、ご入居者の日々の暮らしぶりや、趣味、性格などを事前に共有できるので、その方に合ったケアプランを立てやすいと感じています。

高塚：ケアプランセンターと生活サービス課は、同じフロアで机も隣同士ですよ。

金子：はい。常に情報共有ができていますので、対応もとてもスムーズです。在宅支援の事業所も同じ建物内なので、通常は申請後に各事業所へ相談しますが、「一番館では申請前から」どのような支援が考えられるか」を各事業所と相談できます。申請前から具体的な提案ができるのは、大きな強みだと思います。

まずは家事の支援から  
言葉にできない困り事も察知

高塚：訪問介護のヘルパーステーションでは、まだ介護認定を受けていない方への支援も行っています。

ているので、その情報を共有すること、より適切な対応につながっていると感じます。

菅野：以前、訪問看護で異変を察知し、生活サービス課とケアプランセンターに

情報共有して、すぐに受診につなげたケースがありましたね。結果的に入院しましたが、大事には至りませんでした。二番館でも受け入れの準備を進めていましたが、あの時の対応の速さと体制は、本当に心強かったです。生命に関わる部分はスピードが命ですから。

施設内のデイサービスで  
認知症予防や引きこもり防止

大野：デイサービスが近いのも魅力です。一般的な住宅型ではバスで送迎するケースも多いですが、「ここでは歩いて行けます。居室のお風呂や大浴場での入浴が難しくなった時に、デイサービスを利用される方が多いです。」

長谷川：デイサービスはすべて介護保険での利用になるので、ケアマネジャーからの依頼で支援が始まります。入浴のほかにも、機能訓練や脳トレ、



聖隷訪問看護ステーション 藤沢 所長  
ヨネクラ ナオミ  
米倉 直美  
2011年入職



すが、どのような利用が多いですか。

與五澤：高齢になると、最初に負担が出やすいのが家事だと言われています。介護認定前でも、居室の清掃などを行う有償サービス「さわやかサポート」を利用される方もいますが、多くは介護認定後の利用です。支援のスタートは清掃が多く、ケアマネジャーから依頼を受け、ヘルパー、生活サービス課と三者でご入居者の困り事を伺います。その中で、排泄の支援や服薬の管理が必要だと分かるケースもあります。ご本人が言い出しにくいことも多いので、本当に必要な支援を見極めていくことも、私たちの大切な役割です。

大野：清掃支援から始まり、排泄の支援、服薬管理の必要があれば訪問看護へとつながっていきます。自宅での入浴が難しくなった場合は、デイサービスでの入浴支援を利用するなど、ご入居者の状況に合わせて支援が広がっていくイメージですね。與五澤：ヘルパーは生活支援が中心で、薬の飲み忘れがあれば声をかけ、飲んでもらうことはできますが医療的な服薬管理はできませんから、

訪問看護との連携が大事になります。医療や体調に関わる相談は、米倉さんの所に聞けば間違いありません。

薬の管理から看取りまで  
看護のプロがしっかりサポート

米倉：服薬管理では、まず主治医に連絡をして、お薬の内容や服用方法を確認します。必要に応じて薬局とも連携しながら、内容や回数を調整することもあります。定期訪問の中で服薬状況や血圧などを確認し、ケアマネジャーやヘルパー、生活サービス課と情報を共有しながら、「どうすれば無理なく続けられるか」を一緒に考えています。

高塚：同じ建物の中に、看護のプロ、介護のプロ、そして家族に近い生活サービス課がいて、何かあればすぐに集まって相談できる。臨機応変に対応できるのは、大きな強みですね。

米倉：はい。訪問看護には医師の指示書が必要なので、ご入居者ごとに異なる主治医との連携も重要ですが、病状観察や点滴や注射などの医療処置、退院後のリハビリ、終末期の医療ケアまで、みなさんとの連携は欠かせません。一番館には看護師が常駐しており、ご入居者はいつでも相談できます。受診の手配や日々の健康状態も把握し

長谷川：そうですね。特に一番館は単身で暮らしている方が多いので、地域の方との交流を楽しみにされている方も多いです。ここに来れば必ず誰かがいる。いろいろな方と話をすることが、元気の源になっていると感じます。

大野：二番館で介護認定を受けている方は2割程度、比較的軽度の方が多いです。早めに介護認定を受けて、認知症予防や生活支援サービスを活用していただき、自立した生活ができるだけ長く続くよう支援しています。

一番館での生活再設計も担う  
24時間介護の二番館

高塚：年齢を重ねて、自立した生活が少しずつ難しくなってくると、24時間介護の二番館への住み替えを検討する時期が来ます。ご本人やご家族の思いを伺いながら、各事業所の関係者が集まるケア会議で話し合いますが、簡単な決断ではありません。

菅野：できるだけ一番館で暮らし続けたいという方も多いですからね。二番館には、退院後や生活に支障が発生した際に利用できる一時介護室があります。1週間から10日程度、一番館に戻るための課題を把握し、生活サービス課や各在宅支援と共有しながら、



聖隷デイサービスセンター 藤沢 所長  
ハセガワ ユキコ  
長谷川 由貴子  
2015年入職

聖隷ヘルパーステーション 藤沢 所長  
ヨゴサワ サチコ  
與五澤 幸子  
1992年入職



「一番館での生活設計を話し合います。皆さん本当にご入居者の笑顔を第一に考えていて、その姿勢にはいつも刺激を受けます。」

高塚：一番大切にしたいのはご本人の気持ちです。なぜ、そう思われるのか、その背景を丁寧にくみ取りながら、どうすることが一番その方にとって幸せなのかを、皆で考えています。

菅野：最終的に住み替えとなった場合でも、二番館には介護士や看護師が常駐し、ご入居者の情報は在宅支援の皆さんから引き継いでいます。ご家族の方にも安心していただける体制が整っていますし、藤沢エデンの園だけでなく、在宅支援のスペシャリストの皆さんと一体となって支援できることは、大きな強みですね。

### 人生の最期を自分らしく 願いを叶えるワンチーム

高塚：住み慣れた場所で最期まで暮らすことができるよう、藤沢エデンの園はご入居者にとっての「自宅」であり続けたいと考えています。人生の最期をどう迎えるか、看取りも私たちの大切な役割の一つです。

大野：エデンの園では「あいりす」というエンディングノートを活用し、毎年ご入居者のお誕生日に居室を訪問して内容を更新しています。一番館では看護師が中心となり、将来の医療や介護についてご本人やご



高塚：皆さんの仕事ぶりを見てみると、困っている人がいれば自然と手を差し伸べる、そんな強い思いを感じます。これは私たち聖隷の職員に共通する姿勢ですよ。

菅野：私が入職した頃、「そこまでやるのか」と驚くこともありました。でも、先

家族と話し合いながら、意思決定を支援するアドバンス・ケア・プランニング（ACP）を進めています。

米倉：「自宅で最期を迎えたい」と希望される方については、ケアプランセンターから依頼を受けて訪問看護が入り、訪問医の手配を行いながら、一番館のお部屋での看取りを支えます。

高塚：以前、病状が急変した方がいらつしやいましたね。通常であれば二番館へ住み替える状況でしたが、皆で協力して福祉用具や訪問看護をすぐに対応し、ご本人の希望通り一番館で看取ることができました。医師への連絡や、夜間は二番館の職員がサポートする体制を整えるなど、非常にスピード感のある連携でした。ご入居者の願いを叶えたい思いで一つになる、本当に素晴らしいチームです。

### 私たちがやらざる誰がやる 根底にある「やらまいか」精神

高塚：本日は貴重なお時間をありがとうございました。最後に、皆さんが仕事をやる上で大切にしていることを、一人ずつ聞かせてください。

### 仕事をやる上で大切にしていること

高塚：本日は貴重なお時間をありがとうございました。最後に、皆さんが仕事をやる上で大切にしていることを、一人ずつ聞かせてください。

與五澤：ヘルパーとして、障害のある方のお宅にも訪問しますが、常に意識しているのは「二人の人として接する」ということです。特別視せず、その方が本当に困っていることは何かを考えながら、話を聞き、目を配ってケアを行っています。

大野：一番大切にしているのは、「常に見守っていますよ」という信号を出し続けることです。そして、「ご入居者が望んでいるであろう距離感を保ち、誠実に、真摯に、偽りなく接すること。皆さんは人生の大先輩で、私たちの考えはお見通しですから、

長谷川：デイサービスには、50代から100歳まで、さまざまな方が利用されています。事情は人それぞれですが、ここで過ごす時間を楽しんでいただくことを第一に考えています。スタッフ全員で明るく接し、一人ひとりの不安に寄り添うことを大切にしています。

菅野：一番意識しているのは、チームで連携してケアを行うことです。一人でできる事には限界があります。二番館の中はもちろん、一番館や在宅支援の事業所の皆さんと常に情報共有し、ご入居者の願いを叶える支援ができる連携を常に心掛けています。

米倉：訪問看護では、「おうちにおいてよかつた」と思っていただくことを大切にしています。暮らしやすさと医療のバランスを意識し、やり過ぎないこと。私たちの思いが強すぎると、かえって負担になってしまうこともあるので、その線引きには気をつけています。

金子：介護保険の利用で最初に関わるのが、私た

ちケアマネジャーです。介護や看護への橋渡し役として、その方の思いを代弁できる存在でありたいと考えています。そのためには、性格や家族背景、生活環境、考え方などをできる限り理解するように常に心掛けています。

### 15年間で点から線へ 更なる進化を目指して

高塚：私が常に意識しているのは、ご入居者に「藤沢エデンの園に来てよかつた」と思っていただけの支援ができていくかどうか、ということ。一番館、二番館、そして在宅支援の各事業所が、それぞれの役割を果たしながら、きちんと連携できているか。私自身看護の仕事が長いので、特にケアの部分には自然と目が向きます。今日の座談会を通して、皆さんの連携の質やスピード、そして一体感を改めて実感できて、とても心強く感じました。與五澤さんは、開設当初から15年間ずっと現場を見てこられましたか、いかがですか。

與五澤：開設当初も「みんなで協力してやっていこう」という気持ちはありましたが、それぞれ自分たちの業務で精一杯だったと思います。当時は一番館のご入居者も皆さんお元気で、支援を必要とする場面は多くありませんでした。年齢を重ねる中で支援の機会が増えていくにつれ、自然と連携の質が高まり、対応のスピードも速くなってきたと感じています。



輩たちは皆、「私たちがやらざる誰がやるのか」という気持ちで仕事に向き合っていて、その姿がかつよかつたのです。いつの間にか、自分も同じように行動していました。

高塚：聖隷福祉事業団が生まれた浜松には、「やらまいか」という言葉があります。何事にも恐れず、まずやってみる。悩む前に行動する。そんな氣質が私たちの根底にあるのだと思います。

大野：これまで当たり前のようにやってきましたが、今日改めて話を聞いて、私たちの連携の質やスピードは特別なものかもしれないですね。同じ思いを持つ職員が集まっているからこそ、できているのだと思います。

最初は点だったものが、今は線につながっている。そんな実感があります。

高塚：私たちが目指してきた「ウエルフェアタウン版地域包括ケアシステム」の、入居から最期まで各施設が一体となってご入居者を支える仕組みが、少しずつ形になってきたのだと思います。一人ひとりのご入居者と向き合い、話し合い、時には試行錯誤しながら積み重ねてきた15年でした。

これからは、さらに支援を必要とする方が増えていくことが予想されます。利用者が増えても、ケアの質を維持できる体制を整えながら、一番館では介護予防の取り組みを更に進めていきたいですね。最期まで自分らしく、安心して暮らしていただけるように。これからも力を合わせて取り組んでいきましょう。



高塚：皆さんが仕事をやる上で大切にしていることを、一人ずつ聞かせてください。

高塚：本日は貴重なお時間をありがとうございました。最後に、皆さんが仕事をやる上で大切にしていることを、一人ずつ聞かせてください。

※ACP(通称:人生会議)とは、もしもの時のために、自分が望む医療やケアについて前もって考え、家族や医療・介護チームと繰り返し話し合い、共有するプロセスです。